

V-2

聴覚障がい教育

(1) 難聴特別支援学級

補聴器等を使用した状態で通常の会話における聞き取りが部分的にできにくく、通常の学級での一斉の学習活動において、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感をもつことが難しい児童生徒が対象です。小・中学校等における各教科等の内容に加えて、聴覚活用に関すること、音声（話し言葉）の受容（聞き取りや読話）と表出（話すこと）に関することを中心に指導します。

(2) 指導に当たっての考え方

聴覚障がいの状態から、言語発達やコミュニケーション技能、学習内容の習得、社会参加等に種々の課題を生じる場合があるため、必要に応じて、学習や生活で用いる語句・文・文章の意味理解などの言語概念の形成や活用に関する指導、コミュニケーションを通じた人間関係の形成に関する指導、障がいの特性の理解やそれに応じた環境の整備に関する指導などを行うようにします。また、教室内の騒音の低減や補聴援助機器の活用、発音・発語指導に用いる鏡の用意など、教室環境を整備するようにします。

(3) 教育課程の編成に当たって

難聴特別支援学級では、それぞれ小学校、中学校の教育課程の基、教育を行うとともに、聴覚障がいによる学習上又は生活上の困難の改善克服に向けて、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領に示す自立活動を取り入れます。また、児童生徒の障がいの程度や学級の実態等を考慮の上、各教科の目標や内容を下学年の教科の目標や内容に替えるなど、実態に応じた教育課程を編成するようにします。

指導のポイント

- 補聴援助機器等の活用や、音声文字変換システム等による情報保障の実施など、聞こえにくさを補うことができるようにするための配慮を行います。
- 外国語のヒアリングにおける音質・音量等の調整や文字による代替問題の用意等、音声による情報が受容しにくいことを考慮した学習内容の変更・調整を行います。
- 教科書の音読箇所的位置を示すなど、聞こえにくさに応じた視覚的な情報の提供や、テニスボールを利用した机・椅子のノイズ軽減対策等、聞こえにくさに応じた環境構成を行います。
- 体験したことを話したり書いたりすることにより言葉と結び付けるなど、言語概念が形成されるよう配慮して指導するとともに、日常生活の出来事の因果関係や必要なルール等を理解するために、視覚的な手掛かりを活用したり、実際の場面を想定して考える機会を確保したりします。
- 周囲の話し声や音などの情報が入らないことによる孤立感を感じさせないような学級の雰囲気作りを行います。

事例

児童が環境に合わせた適切な音環境を自ら整えようとする力を身に付けるための自立活動の取組

児童の実態

- ・補聴援助機器を使用することで、話の内容をおおよそ聞き取ることができる。
- ・日頃から、他の児童と同じ環境で学びたいと希望しており、交流及び共同学習の際に、補聴援助機器を使用しないことがある。

「自立活動」学習指導案

題材名	「暗号を解読しよう」		
日時	令和2年10月18日（月） 4校時目		
対象児童	小学校第6学年児童1名	担当	〇 〇
時間	学習内容	手立て	
導入	1 言葉の仲間集めをしよう。 ・動物の名前が入った言葉集めや同じ部首の漢字集めなどの言葉遊びを行う。	・語いの拡充を図るため、教師と一緒に言葉遊びの活動に取り組む。	
	語音を聞き取って、暗号を解読しよう		
展開	2 CDから聞こえてくる言葉を聞き取り、暗号を解読しよう。 ・CDから聞こえる語音を聞き取るとともに、聞き取った語音を並べて、言葉を作る。	・児童が、課題に意欲的に取り組むことができるよう、学習の中にゲーム的な要素を取り入れる。	
	3 自らの聞き取りの状況について、振り返る。	・児童の心情に配慮しながら、聞き取りの状況について確認する。	
まとめ	4 授業等で補聴援助機器を使用する意味について考える。	・交流学习等の具体的な場面を想起させ、補聴援助機器の必要性について、考えさせる。	

聞き取ることができる音とできない音があることに、児童が自ら気付くことができるようにします。

補聴援助機器の必要性について、児童自身の考えをもたせるようにします。

【取組のポイント】

- 言葉や語音の聴取に関する学習等、児童が苦手さを感じやすい活動には、ゲーム的な要素を取り入れるようにすることで、楽しんで活動に取り組めるようにする。
- 学習を通して、自分自身の聞こえにくさによって、人と関わる際にどのような困難が生じるかを考えたり、補聴援助機器の使用等、自ら音環境を整えようとしていたりするなど、積極的に問題を解決しようとする意欲を育てるようにする。

【成果と課題】

- 児童が補聴援助機器の大切さについて実感することにより、必要なときに、自ら補聴援助機器を使いたいと周囲に伝えることができるようになった。
- ▲ 語音の聴取に関する学習では、児童が聞こえにくいことで自信を失うことがないように、回数や頻度、実施の時期について検討した上で指導を行う必要がある。